

## 林 知己夫

——透徹した哲学と調査への愛着——

飽 戸 弘 (東京大学名誉教授)

「調査の達人」に林知己夫先生が取り上げられるとのこと、前号までの記事を読み返してみた。だがどうもいままでのようにはいきそうにない。これまでの“達人”は、後世に残る名著を著わされ、または名調査を完成され、それがゆえに達人として紹介されている。林知己夫先生はあまりに多くの名著を残され、あまりに多くの名調査を完成され、どれかを選ぶことは、至難の業だ。

先生の業績は、著書、約100冊、論文・エッセイは約1500篇に及ぶ。後世に残る名調査も、政治(選挙研究)、経済・経営(マーケティング)、法学(法意識)、国民性、国際文化比較、医学(疫学)、農学と、あらゆる分野にわたる。こうして、業績については、『林知己夫著作集』全15巻(5000頁)、勉誠出版、2004年刊、に委ね、ここでは、先生の学問の特徴、調査への信頼と愛着、社会現象への飽くなき好奇心、そのお人柄などより、調査の達人たるゆえんについてスケッチすることで、この重責を果たすべく、試みてみたい。

林知己夫先生と初めてお会いしたのは、私が大学を卒業し、世論調査機関に就職した1959年の夏のことだった。それから先生が逝去される2002年まで、40余年のお付き合いであった。以来先生とは、政治意識研究、マーケティングリサーチ、価値観・国民性比較研究など、さまざまな研究に共同研究者の一員として加えていただき、まさにオンザジョブ・トレーニングをしていた。

とくに数量化理論が徐々に完成していくなかで、小規模なモデルのデータでは解けることが確認されているが、まだ実際の大量サンプルによる世論調査、市場調査のデータでは解けていないとき、先生との共同研究や小生らの調査データで初めて解けた歴史的瞬間に、幾度か立ち会うことができたのは、忘れ難い思い出だ。

先生の学問の神髄は、徹底したオペレーショナルリズムだと考えている。数量化理論でも多次元尺度解析でも、さまざまなモデルを適用してみて、役に立てば利用すればよいし、役に立たなければ使わなければいい。新しいモデルを作るのもよい。こうして数量化をはじめとする数多くの画期的かつ斬新な数理モデルが、次々と作られていった。

先生の“調査に対する厳しさと愛着”には心から敬服する。調査の設計段階では、徹底して、慎重のうえにも慎重を期し、計画を立てる。しかしいったんデータが得られたなら、そのデータはとことん信頼し、尊重する。

先生はまさに調査を信頼し、愛しておられた。ある時ちょっと無理だろうが、こんな仮説にチャレンジしてみよう、という調査を断行したことがあった。夜中に電話がかかってきた。先生からであった。「飽戸君、出たね！出たね！！」と、子どもが踊り上がらんばかりの声で、一言話され、電話はすぐ終わった。仮説どおりの結果が出たのだった。

もう1つ、重要な先生の研究の原動力は、社会現象に対する飽くなき好奇心であろう。あらゆる分野の、あらゆる問題に関心をもたれ、それを実証的に検討するべく、つねに熱い情熱をもって、全力を注がれた。先生が驚くほど広範囲にわたる研究領域を開拓されたゆえんである。先生はそうした新しい研究領域で共同研究を指導されただけでなく、立派な後継者を、お弟子さんを、しっかりと育てられた。これが先生の巨大な財産として、多くの研究分野に、いまも受け継がれているのだ。

林知己夫先生が、「調査の達人」であり、そしてまさに「調査の巨人」である所以であろう。

## ルイ・ガットマン

真鍋 一史（青山学院大学総合文化政策学部教授）

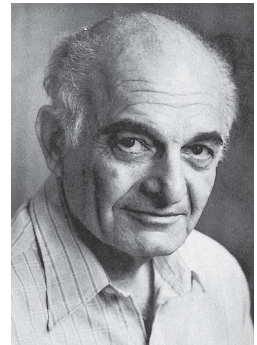
L. ガットマンは、その71年の生涯を通して、じつにさまざまな「質問紙調査」を実施したが、それらは「学問的要請」とともに、「社会的要請」に応えるものであった。前者は、それが実証科学における知の蓄積に寄与するものであったということであり、後者はそれが現実社会において役立つものであったということである。

まず、後者の「社会的貢献」という点から始めるが、ここでは、米国コーネル大学の社会学の助教授であったガットマンがパレスチナに移住した1947年（1916年生まれ、31歳）以降の調査活動に焦点を合わせる。当時はパレスチナのユダヤ人によって対英闘争が繰り返されており、有名な「エクソダス号事件」も起きていた。ガットマンは、イスラエル国防軍に付属する調査班を組織する。第二次世界大戦中、米国の戦時研究に携わった経験をイスラエルの建国のために役立てようとしたのである。この調査班は、第一次中東戦争（1948年）を経て独立し、民間の非営利研究所としての地位を確立し、「イスラエル応用社会調査研究所」へと発展した。研究所の調査活動はめざましく、イスラエルの経済計画、外交政策、移民問題、地域開発、住宅問題、職業、女性の権利などさまざまなテーマを取り上げ、そのような調査活動にもとづいて、国の政策決定がなされることになった。それは、イスラエルの国家建設に資するという意味において、文字どおりきわめて大きな「社会的貢献」であったと言わなければならない。

つぎに、前者の「学問的貢献」という点については、それは、さまざまな調査活動にもとづいて、「ファセット・アプローチ」が集大成されたということにつきる。ファセット・アプローチという考

え方は、ガットマンによって考案された独自の社会測定のアイディアであり、実証科学のこの領域における1つの到達点を示す方法論的な提案であった。それは、たんなる分析技法論であることを超えて、1つの科学方法論の立場を宣言するものであった。ファセット・アプローチは、つぎの3つの領域から構成される。(1)ファセット・デザイン：質問紙調査の理論的仮説を表現する独自の手法の開発。(2)ファセット・アナリシス：仮説検証型のデータ解析の技法。「尺度分析」「部分スケログラム分析」「多重スケログラム分析」「最小空間分析」「中央値回帰分析」など。(3)ファセット・セオリー：質問紙調査にもとづく人間行動の諸法則・理論の定式化（詳細は木村・真鍋・安永・横田『ファセット理論と解析事例』ナカニシヤ出版、2002年を参照されたい）。

米国の有名な科学雑誌 *Science* は、ガットマン・スケールを20世紀における社会科学の“major advances”の1つに選んだ。しかしファセット・アプローチはさらに21世紀においてもその重要性を主張することのできる科学方法論の1つである。それは「国際ファセット・セオリー学会」——筆者は1976～77年、イスラエルでのガットマンとの出逢いを通してファセット・セオリーへと導かれ、学会の理事・プログラム委員を務めてきた——を中心に発展し続けている。ガットマンは、「調査の達人」であるとともに、「科学方法論の達人」でもあったのである。



ルイ・ガットマン